

古今抄名蹟考 二

時  
總紀

和書門			
三	四	六	七
一	二	三	四
五	冊	函	號

内閣文庫			
二	二	函	
五	九	冊	號
五	九	冊	號
三	四	六	七
一	二	三	四
五	冊	函	號
和書			

内閣文庫	
番號	和 34671
冊數	5 ( 2 )
函號	202 135

共五



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり

編脩地志  
備用典籍

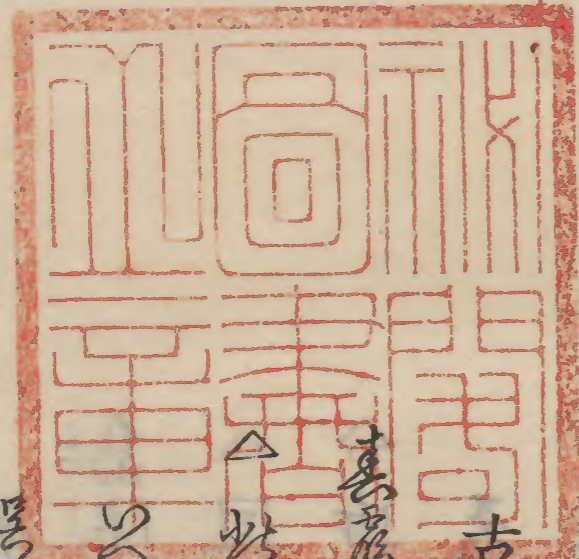
按名蹟考第二

吉野

大和

按吉野をみよりのとらふ

古今集



嘉慶のころやいかにみよりのよき山ふきとあつは  
△此歌契仲餘材抄云えよりのとらふの山と名ふ  
いふ或説ふ吉野郡は有吉野山をまじりて思へり  
後也第第五は吉野の玉手とて久と讀ふ玉手と  
真玉手とていふ又第集は吉野とていふ見ゆ  
よこまのよとみよりのよとていふよとみよりの

五音なればやきよなるは吉野を其吉野と  
ほめくみりしものことなり云

真熊野 万六十丁

山部宿祢赤人

島隱シマカシレワカコキシレバトモシカモヤトヘノボルニクミノ吾榜來者之毳倭邊上真熊野之船フネ

同卷 世三丁もみりし國志ぬ言なりしことなり

△近來志洛梅月堂宣阿が系尾系流解云云はのり  
天武天皇の皇居有し山部宿祢の言なりしことなり  
上中下の三所あり故にその説ありしことなり  
用ひ難し真吉野なり真を譽るは初なり  
第五に其玉手の玉手はしるしとよめり玉手をはめて

しるし又美葉六ふりしことなり  
登海とへのりし真熊野の船其熊野と云ふ  
とぬ登とよめり又美葉と云ふてんことなり  
まといみし五音相通してよめり是ふなり  
真吉野と云ふことなり登とよめりを記す  
△又紀氏某が所伝一系抄云云はのりしことなり  
とも其吉野又と云ふ吉野なりと云ふことなり  
ことなり登とよめりし川あり里ありは其吉野と  
書と云ふ又吉野は麓ふと市巾着下布と云  
ありぬ其吉野と云ふことなり其吉野と云ふ



譽々くいひ詞をて馬孝大と云其外掲くありあ  
紫<sup>ミタラシ</sup>御執の梓弓<sup>アツサユミ</sup>な少あも弓をはめくさへる詞  
なり前よりいごとくみさくしとのとま吉聖馬吉野  
いづもいそとまよりのといふも貴殿の義也云々

○今按<sup>ル</sup>右の二書の後おそくく信もろといふ也  
後の二書と共契沖乃餘材抄の後より信なる  
也一信もバ重くくくに裁角のうべといふも  
彼契沖ハをそよあくひとり和學に英才殆古今  
題紙せ一人なりよりて二書の註者も今其説に  
値ひしとまえとまバ末學<sup>アキ</sup>作く彼美小為指す云々

為且ハ後の二書別小吳説をも並載しよバも吳  
説小法とくも聊愚直の思ひのまをさすを中出ん  
とて終く書出せり

○榮按<sup>ル</sup>小紀お熊野ハ古靈神跡を垂まるとより  
萬乗お主仙蹕を南山の雲<sup>ウナガ</sup>に傳えれ四を乃衆庶嶮  
巉<sup>シメス</sup>城凌<sup>ツチ</sup>く跡を継ぐ去うのこなきの秦の方士徐福  
反にありてとまかりし後とまら遠業の名あり又  
和州吉野ハ神武天皇をドめてけまふありあひ  
しより其名從來已久し法をて 應神帝有  
野宮小寺一あり後代に於聖主齋を成す也

三躰詩卷三

絶句

冠蓋

曲江春望

唐彦謙

漢朝冠蓋

皆陵墓

漢朝冠蓋トハ

漢ノ朝廷ニテ高

位厚祿ノ人ヲ

指冠ハカレムリ

ナリ蓋ハ車上ノ

キツカサナリ

吉野の花を祢代

と云ふ

夫木抄四巻四花ア

洞皮撰政家百首

前七酒言定家

ちやふと祢代の

こころをふゆふ

よみぬ山を

やとくまらむ心

年々小隙孝有さるべオホキ從駕へ於冠冕の詞藻或ハ

未遊せる風人の歌篇抄を屈く不可識數無くも

名の名多き勝地とて昔は辨たる名匠なりかハ

ととに褒賞の義もそ真熊野と吉野といふん

り實ふこころなりをいふはさるるもとより

ひとり此等のそなへ守他處も同名の地あるや

或花園入間郡とて又吉野の里あり彼郷と東

方所邊陲小ありそころ知ら人たれぬをいふ

伊勢物語よきるにり僅は其名をも昔と不知

色より且そ地をさる佳境ともやえさるるといふ

又みよりの名を同一なるも真の字を通ぐ

褒賞の儀とすべきや尤謂をなくこそけ外山城岡

紀伊那智郡の色もそころの地名ありと昔の

源平蓋裏記三十一巻は東寺四塚造り道師吉野

志賀柳原をいふは〜の載り又その字をいふを

と〜褒賞の儀とせむはスガまはは〜と

唯の〜何ぞみらぬ聖とよりのと稱すべし萬葉

真熊野とあるをいふの〜とよの字をみらると

よめると五音通する故にあり又その字をいふ

と〜とを褒賞の義もそ真の字をいふと

わづらふ多なり凡衆語よとの字をそへていふ類ひ  
先哲と伝稱の多のこと思へるなりとてあへていふ  
とのびー一伝語の上よとの字をそへていふ傳譽  
傳のよあへて傳多あり又其の字をそへていふと  
まゆえと曰き通して真をそへていふとあへていふ  
僕曾て今按傳語考を編述して味果<sup>イモロ</sup>こま<sup>ハタチ</sup>とて  
傳を詳よせり于此事長とてゆえ思<sup>ス</sup>

○榮今傳名抄を按ふ吉野那郷名

賀美<sup>カミ</sup> 那珂<sup>ナカ</sup> 資母<sup>シモ</sup> 吉野<sup>ヨシノ</sup> 乃<sup>ノ</sup>

とあり思ふ小賀美の上なり那珂ハ中なり資母ハ下也

吉野三郷あるふとて上中下といふことなるなり吉野ハ  
惣名なり上中下ハ吉野の上中下とて細目なりこれ  
ハ彼三郷を都<sup>スベ</sup>合<sup>ス</sup>せとて吉野とていふなり也  
三吉野のよりとて重なりていふハ惣名細名なり  
いふなり又按ふ備後國ハ三<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>郡あり次の字を與<sup>ヨシ</sup>之<sup>シ</sup>  
と訓ど傳名鈔彼那の郷名上<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>播次下<sup>ニ</sup>次とてあり  
是も亦<sup>モ</sup>之<sup>ノ</sup>次<sup>ノ</sup>の字あへては三郷ふとて郡名を三<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>  
那とていふなり傳セ思ふべし然るも亦吉野新  
宮村の邊小上熊野中熊野下熊野とて三邑あり今の  
新也も然野<sup>クラ</sup>村の内なりは上中下のこの邑有ゆえに





建立一ヶ所  
時其材を架一  
つて置れ一多  
なる山を本谷と  
いひたりん  
墨坂神武天  
皇此国小入  
一財菟田の八  
十集師軍を  
分て姉山成  
王一所なりし  
ゆまは名なり  
と云ふ

三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖思直不相鴨

茶寮卷四

柿本朝臣人麻呂

三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖思直不相鴨  
つてもと三熊野と云ふありいんぞ正字を遣まて假字  
をとらん又えり一野ハ茶寮と云ふもろく三吉世二方  
聖とのことかきりて見吉野ともめりて見  
ハ假字と見の字よき義なり一源吉野と云ふをバ  
りまてえり山あり川あり里あまがといひ上中下  
下中とてあるゆゑなりてこれらの説はとてゆは  
するよと云ふ又 天武天皇の皇居あり一ゆまの

ゆまのといふ説ハ自語よりいふごとく僻事なり 天武ハ  
天智帝の東宮を辞して傳と成り吉野小入あり  
是時皇居といふべし又云えり一のといふ言月  
をの名所なるゆゑはめて云ふハ僻を難波の二はと  
又と傳はともかきりてひも同ト云なりすべく傳と  
はめていふ詞も傳事大なるを介さぬくあり茶  
寮ハ傳執の控弓なりと云ふをばめていふ詞なり  
前ハいふごとく一のといふ真言聖傳吉野の所也  
うてもみり一のといふ茶寮の義なりと

○業謂言月をの名所なるゆゑはめていふやとの義ハ真の

字をえとよひ義を辨せざりて真言宗の儀ふそろえ

しるなまをばいりあよひるるる重くひく論するふ及む守

又傳の字を加ふ事ハハ後のごとく或ハ褒美の義又ハ

敬しといり此中ハ難波の傳津傳幸大傳酒なとと

敬していり後なる傳執の様弓といり或弓を母めく

いりと思へといり或矢やうそれ刻をえといり弓をえ

とらうといり類ハ刻又ハ弓をはめて傳の字をそめふハ

あはれ劍もらも大人弓矢の身は帯し手ふらうあ

このなる思ふ人を敬して見まうしとらうしとらうし

傳の字を秘せり依く庶人のうへうをとらうしとらうし

のこゆあべしとらうしとらうしとらうしとらうし

とらうし人を敬して彼義を敬しおハけむふあ

ささむべなり

萬葉卷二 柿本朝臣人麻呂

大御身爾太刀取帶之大御手余弓取持之云

とらふそのふはあべしとらふ大王之御笠之山

とよあふもあをいふふあはれ大玉を敬するをいふ

とらふとハけけしなり傳の字を進也とも往せり凡く

天子之衣服加于身飲食之入于口妃妾之接于

寢器物之用于手皆御といりあはれ衆語の上宗

上下畧  
妹之着三笠  
乃山余万六  
これハ妹をか  
ぼくちよ傳の手  
をそへう  
旧事紀三丁  
本紀 卷六皇孫  
皇弓  
止于皇弓之  
彈

真の字をそごいふ類も其物よりて美も是なり  
此の字を彼とよむ本訓なり凡とよむは夏訓ある  
ハ美も是なり然法彦もこのころの美を云く一々  
せりてまと見とら同音なるゆゑ通下よとて同義  
なりと思へり且日本紀よりみづめ古書<sup>コ</sup>よ人名地名  
等正字<sup>マ</sup>美字を用ゆることの常ふあつし一かゞ就  
中糸紫ハ偽<sup>カリ</sup>字尤多し三吉野三熊野とあるは  
正字なり見吉野<sup>ミ</sup>熊野<sup>ミ</sup>出づるハ見と真とハ偽<sup>カリ</sup>  
字なり詳よ察せざれば正字偽字の分別なく遠小<sup>ワツカ</sup>  
偽<sup>カリ</sup>字よりて美を求めば必あやまることの多しべし

續後拾遺春上

土御門院

三吉野の字はつとて雁<sup>カ</sup>の字もいふがふとなくん  
○按ふは歌也よほとく大和に入るとなるとや  
本歌よよるに武花園八間郡三吉野の里名焉と  
すべし大和の中よ入るのうす吐懐緇小とせし  
是と出づるなり

高島

近江

新拾遺秋下

増基法師

高島や雲の指ふち風はふし心付そ鹿も鳴る  
○此高ハ今印<sup>シ</sup>の新拾遺集小

○ 増基法師

高砂や松尾指に明の飛乃身一む時を麻衣なきに

初白ぬ載えし物れもころもく皆終りのあやまら

なまべ一此うと増基法師は幸江國言師山うそを免所

考して初白言抄ゆなり彼遠江記りふもえり

夫木抄とと此歌を載

あり山妻の摘ふく風能身に心時を鹿もなく影

とあり物色かろよ言意とて載るあやまら

田菟浦

駿河 越中有同名

新拾遺夏春土

法印定圓

日月あけあすの村名は名屋のさすそめさこれうと波

○ 今按ふ古江村をよこ合をうすの越中の多括浦なり

これ入るあやまら

高瀬山 峯

未勘

玉葉旅

大江頼重

ふ初とまこ峰と母一高瀬山と名もとの法よのころ

風雅旅

前大納言為兼

本との勢山妻の志さ及多のハ夕嵐さまこあふ人か

○ 按ふ此二首哥の遠江國高師山をよめり富中の誤り

法とてと印流布の本もたる色山とあり物色

高瀬山別小あぶにゆく但及谷屋集より高瀬山  
ありこれより後人抄写のあやまるとなすべし

孫谷屋集

高瀬山秋

高瀬山夕なるとむら秋風小あやうそ下流はうそを  
いそ夫木抄第十二は載く初るたう山とあり

里とやと安人なりふは然しこのてあをたせの山乃秋風  
はそ又回巻は載作者系為影とありて下白流を  
たうのゆは秋風とあり

夫木抄第二十九

高瀬山秋

孫系為守

吹おる麓の畔に露おらうこをたうれうの春風  
此そ歌ふ高瀬山とありて歌ふたうのうとあり  
これより引合をて抄写のあやまりなるとを知らず

又夫木抄二十三

王出歌

前中納言為兼

たう高山朝とえとれは淡雲乃入海をそく波そいさよふ  
法眼慶融

たう山おえとてこれハ淡松の一すちとゆさうそ入海  
い二首を並載しうあそれそ歌をたうとそ初め

歌へたを山とあり後の秀へたう山と載るり也  
初の哥もよさたり山をあらまはるなるべし  
よこ合さる小法も遠近なる事ハ明らふ事  
しるるや

王出岸

未勘

新拾遺

津守國平

君うま玉出の岩小やうとる光乃末ハ子世も  
今按小玉出岩ハ摂州住吉郡あり玉出意玉出岸  
同多なりけ事事出小住吉社歌合社頭祝也あり  
当社考合の事なる由是地の名所を社頭祝よせて

よあり他者又其人を是かうく由緒ありや

△追考住吉大神ハ攝州住吉郡小在今所稱<sup>元</sup>

- 一社 底筒男命
- 二社 中筒男命
- 三社 表筒男命
- 四社 神功皇后

一説

- 一社 天照太神
- 二社 宇佐姫
- 三社 表筒男
- 中筒男
- 四社 神功皇后

一説

- 一社 天照太神
- 二社 田霧姫
- 三社 底筒男
- 中筒男
- 四社 神功皇后

一説

一社 伊勢太神宮

二社 諏訪

三社 住吉

四社 玉津島

△日本紀私記云神名帳曰攝津國住吉郡住吉坐

神四座並名神大月次相嘗新嘗先師説云称四座者神功皇

后坐別殿歟

△袖中抄顯昭云故九条亮被中云住吉神主因基

云住吉八本之社なり第四社へ玉津島明神即衣通

姫なり後小いそれ孫小依く好和命孫小云

如新法説匿うて古来彼社家老の従といふも

一定せざる所なり

△玉出意ハ今住吉ありを説小曰神功皇后新羅

伐孫ひ一時干珠満珠の二顆を得くは珠の法用哉

以て彼國をやすく志さぐ孫小其玉の志さる地ハ別今

住吉ある所の意なる由是玉出意と名く皇后二韓

より得くを孫ひく此二の珠を泉州境の飯イヒガイヒの池

納めあり扱イヒガイよ塚に如意明神飯ヒの池ハ宿院有ま

△又或説小神功皇后干珠満珠の二を用て新羅を志

ぐまふといふハ虚説なり皇后秋七月五日冬浦の津

より孫小い此意の珠を海舟小得ありとあり秋日

袖中抄顯昭在

吉四社の中五

時意姫のお

まの女神之其

衣通姫のたうた

まるとやのそく

ごまるとい

葉おとへりて

其ハ衣通姫也

なりぬへこと

セバそくをい

なりといふや

後そよ垂跡

ありといふ

本紀小土佐國吾川郡玉崎小皇后傳云をよめ崎  
小より逍遙あり一時一の白石を採りてその  
る鶏卵のごとく皇后これを衣帯の上小玉を  
に其光り四方小かや兒々色ばたふむのつくこ  
海神の子ふ取能自其珠なりとて大少悦をせめ故小  
を玉を名ばあま玉と云ふ今小撮安廣田社  
小あり又神代よ丸火火出見言湖滿瓊湖涸瓊を以て  
火酢芹命と云ふあまを右の祝と混し  
あやまを傳へたるなりといふて丸火火出見言の  
るを神代皇后と云ふと云ふ傳へたるに撮安

住吉ハ神代皇后のこ化存神の冥地なり又其地と云  
より神代湖滿瓊湖涸瓊の事云神代なり於住吉小  
玉出崎あり津守國平が歌小「天うとめ玉出能島に  
やちうとるひの末へあまことと云ふ」後小彼二  
の珠を泉別境の飯七能池小納めくわたり宿院小故に  
櫻は如意明神なりまた是すなつら丸火火出見言也  
能まハ二珠の事云もれと云ふこと皆住吉を意の  
るよりて又皇后の舊詠なるゆゑ小入へたる南海にて  
如之の珠を得るるをとりあまを法每經に龍女  
寶珠を採りて世言小献せしりよなそへる世俗の



高説なり云々

○今按小初の説ハ皇后の得る満珠干珠二ツの珠を出  
さすハ位吉の玉出處なり後ハ二珠を塚の飯七の池に  
納めたる故小境小女を明神とす一また云々なり  
後新説ハ玉出處と神代小産火火出見言乃乃ぬる湖満  
瓊湖酒瓊の事と神事なり後ハ彼二珠を境の飯七池に  
納めたる事と云々小境小女を明神とす一また是別産火火  
出見言なり湖満瓊湖酒瓊の二珠乃事と云々納り云々  
皆位吉のをさなりと云々住吉旧記の説と云々  
所傳又是小同

○僕按小前後の二説とも小信用し難き事の乎先お新説

○此塚の飯七の池は納めたる事新説を代傳ハ一時的  
干満乃二珠と云々彼 仲哀帝二年七月皇后  
裁前の南鹿より長門に遷す浦小なり云々一時海内を  
得る事此の珠なる事一よりては珠を守護のため  
いふ事此を如き明神と云々又干満二珠  
の事と云々今の玉出乃事と云々又干満二珠  
後の説産火火出見言の事と云々湖満瓊湖酒瓊ハ二珠の  
事と云々此の今位吉の事と云々の玉出處なりと云々又  
信用すべし此神事の事時代出言と云々其事跡いづ  
るの地といふ事後事より推し知る事と云々所傳の按を

あらず尤も珍き説なるべし又湖滿瓊湖酒瓊の  
珠を飯七の池に納めたるなり故に此に如意明神  
すは是則彦火火出見言なりといふことなれば  
納めたるはあよりいふ皇后海中に納めたる珠  
なるべし如意明神の跡に如意珠よりと稱する珠は  
神の傳説のごとく火火出見言なりとあらず彼言は珠は  
能くある由縁なり是彼如意珠を湖滿瓊湖酒瓊と  
いふより如意明神をも是則彦火火出見言なりと  
あらず傳へたるものなり

○案按ふ玉出崎の玉の出たる旧地由來名く又如意明神の

如意珠を飯七の池に納めたるは珠守護のたえふなり  
し一説なり此をいふ玉出崎の故事と飯七の池に納め  
られし玉との其故を推しあはせしむると又別なり此を  
玉出崎の位吉の地より飯七の池に納めしありて其  
をく又前説も位吉の社の志事なるゆゑ一ツのありと  
いふ一説なりといふものなり此の後にいふ事  
又皇后滿珠干珠を得く新羅を志すべしなり虚説  
なり彦火火出見言湖滿瓊湖酒瓊をいふ火酢芹命を  
志すべし古事不混してあらずを傳へたるもの也  
しる彼皇后の干滿二珠のり日本紀等の正史なる

神説野史ハ  
小説ナリ小説  
トテ家々ニ私記  
集允説ヲ小説  
ト云  
小説ト云事起  
リハ漢ノ時ヨリ也  
本朝三部本書  
舊事紀  
古事記  
日本紀

拾芥上末  
日本紀册卷  
一品舍人親  
王從四位下  
勳五等太朝  
臣安麻呂奉  
勅撰神武以  
後文武天皇  
以前或云養  
老四年五月  
二十一日奏

さるべきハ妄説なりといはんも其小理なるとはあらずと  
いふ又古事紀よりそと小傳へて野史小載通くは碑  
に稱すと一傳小拾へくさるるとの記あるを按小本邦  
上古文字なるより六代ノ事跡ことくは碑小傳の  
後世これを彙集して舊事紀古事記日本紀の三書とせり  
然る小彼旧事紀古事記の二書と疑はくさるとの評多し  
或曰凡古事記は按くハ典籍は合さるるより多し姓氏  
録も日本紀は合とありて古事記は合不合のりなし  
古事記ハ日本紀より九年前者奏上なれども正史ハ  
あらずといふるを比沙法あり今そふとことと

日本紀を正史とす然れどもい出さるも又お後の齟齬さる  
る實の疑滞を遂せる文少くなくさふあはる蓋日本紀ハ  
元正天皇養老二年五月奉勅一品舍人親王修撰あり  
神武天皇元年よりこふまで九千二百七十餘年ヲ  
及りゆり多くの年曆を歴く後小口美を據ひ書記を採  
る事あるありとて書記といふことを其間の事變とこと  
せらるるも多し又舍人親王の博閑といふも一人の守る  
所造漏尚多しとてよりて代々の記録其るのり記は出  
小載所九牛が一毛なるをや日本式の説のごとくハ白  
元明天皇時有一舍人年老而能記得上古之事

親王就其人聞所口説之事與諸儒撰集之號曰  
本紀自茲稱舍人親王とのり是既彼舍人のに從に  
よりて古のりを書記し終ひたり忌部氏  
古語拾遺序國史家牒雖載其畧一二委曲猶有  
所遺又姓氏錄序皇極握鏡國記皆燔幼弱迷其  
根源狡強倍其偽説天智天皇儲宮也船史惠尺  
奉進燼書

三善清行昌泰四年勅文曰上古之事皆出口傳  
故代代事變應遺漏なりとのりさるハ史紀の外を古  
より傳へ來りたる街談俚諺とを事實の跡をたすとの

又多ふべし然るを只史書の小に泥く口碑の傳へる  
をすべて虚妄とせんり此傳新といふべし是よりあ  
元明天皇和銅六年法園よおんせり凡そ記を傳へり  
矣あつるもをいかに村や野まの傳へ來りたる俚談或  
まゝめてこそハ記とせめさるひつる古語拾遺跋小街  
巷談猶有可取といふごとく取詮史籍の所載をを  
悉くハ信じざり又口碑の傳へる説をもひとく虚妄と  
のすべしとぞ思ふ彼二珠のり日本紀ふへんえんが  
按皇后紀云冬十月己亥朔辛丑從和珥津發之  
時飛廉起風陽侯舉浪海中大魚悉浮挾船則大

風順吹帆舶隨波不勞楫楫便到新羅時隨船潮  
オモセニキテホツム  
 浪遠逮國中即知天神地祇悉助歟新羅王於是  
ミナオモ  
 戰戰栗栗厝身無所則集諸人曰新羅之建國以  
オノチ ワナキテセムスヘシラス  
 來未嘗聞海水凌國若天運盡國為海乎也  
クテ  
 切して終小兵刃を勞せずして新羅をきこぐべし  
ホノ、ホノ、ホノ、  
 干滿二珠のりハ裁ノセざんごろふ云非常の潮浪の凌國を  
オモセカ  
 令く滿珠を徳用よまきここのなるべし凡此皇后の神  
 威偉徳ありくろり後ていふく守且後そ及びて其  
レイシヨク  
 靈蹤のともなるその法あり満珠干珠をほひり  
 尤信すべし何れ疑ふりありんか良明神を玉垂  
 命と稱するもいふよりのりしゆ患の稱號ありすや  
 ささば彼二珠のり

- △或説云干珠滿珠者納紀州日前宮
- △又曰納肥前國佐嘉郡河上宮
- △又一説長門國津浦志の東ある遠干沼あり奥津平津  
 とて二の嶋あり干滿の二珠をくふおとありしゆ患  
 彼二島をくまひの嶋といひりゆふありしと云はたり  
 満珠を納む江をくまひ平津あり干珠を納む云
- △又或説肥前國彼杵那長崎は旧名を玉浦と稱す今  
ナレコ  
 彼多利湊口の沖は満津干珠の名ありこれ神功皇  
ミツセ ヒルセ  
モトシ





らむとの説よりて今も世俗の説小玉は嶋明神ハ  
允恭天皇孫妃衣通姫を尊ぶより云傳へたり然も  
どとい地は衣通姫の垂跡あり一か縁いなるれや  
未考又その年代とあるべし一説小五十八代の馬門<sup>カド</sup>  
光孝天皇馬悩あり一時帝の馬憂ふ赤と穂とを  
女房は枕よまむ

立入り又もい世不説はむその名もれまじつものうら流  
と此考を備へるべし帝は憂の中小玉をそまむ  
ぞと尊ぶせむひる色の衣通姫なりと尊ぶなり  
こまじよりて仁和二年九月十三日右大臣源隆行を

勅使として紀伊國弱浦小つうの衣通姫を玉津島  
明神といひあり

△或説玉津嶋明神ハ紀伊西日蘇我なり或ハ稚日女言う  
とあり

○今按小玉の説すく其按を去る初の説ハ北畠  
准后親房卿古今集序注小或抄を引く裁られり次の  
説ハを世の人の今按なり

○按小玉畠親房の悟識その幼る所は玉津島に按者  
也一統もどい外の物よとえりなく又或抄とて  
引裁られしをまたりうなるべしと云へり然も



此後の不出も一立して位下<sup>ど</sup>ど<sup>ど</sup>既<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>續日本紀に<sup>レ</sup>載  
聖武帝の<sup>レ</sup>傳字玉は<sup>レ</sup>遠の<sup>レ</sup>神号ハ<sup>レ</sup>ええと<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>尤<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>り  
此地<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>初<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>幸<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ご<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>なり<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>忠<sup>レ</sup>説<sup>レ</sup>を  
弱<sup>レ</sup>浦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>地名<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>雅<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>え  
る<sup>レ</sup>色<sup>レ</sup>バ<sup>レ</sup>これ<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>晴<sup>レ</sup>推<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>考<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>社<sup>レ</sup>考<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>載<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>清<sup>レ</sup>補<sup>レ</sup>胡<sup>レ</sup>臣<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>袋  
系<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>島<sup>レ</sup>親<sup>レ</sup>房<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>説<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>来<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>俗<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>説<sup>レ</sup>に  
傳<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>もの<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>べ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>晴<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>衣<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>姫<sup>レ</sup>と  
傳<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>色<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>説<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>べ<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

○僕今<sup>レ</sup>竊<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>按<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>功<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>后<sup>レ</sup>新<sup>レ</sup>羅<sup>レ</sup>征<sup>レ</sup>伐<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>所  
の<sup>レ</sup>干<sup>レ</sup>滿<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>類<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>珠<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>紀<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>弱<sup>レ</sup>浦<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>晴<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を

○<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>竊<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>按<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>功<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>后<sup>レ</sup>新<sup>レ</sup>羅<sup>レ</sup>征<sup>レ</sup>伐<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>所  
の<sup>レ</sup>干<sup>レ</sup>滿<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>類<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>珠<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>紀<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>弱<sup>レ</sup>浦<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>晴<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を

日本後紀桓武天皇延曆二十三年冬十月壬子  
幸紀伊國玉出島

三代實錄元慶五年冬十二月二十二日丁酉紀  
伊國正六位上玉出島神授從五位下

扶桑畧記延喜六年二月七日授紀伊國伊太祁  
曾明神正六位上玉出島明神從五位上高野御  
子神從五位下

○<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>竊<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>按<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>功<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>后<sup>レ</sup>新<sup>レ</sup>羅<sup>レ</sup>征<sup>レ</sup>伐<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>所  
の<sup>レ</sup>干<sup>レ</sup>滿<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>類<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>珠<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>紀<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>弱<sup>レ</sup>浦<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>晴<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を

○<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>竊<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>按<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>功<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>后<sup>レ</sup>新<sup>レ</sup>羅<sup>レ</sup>征<sup>レ</sup>伐<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>所  
の<sup>レ</sup>干<sup>レ</sup>滿<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>類<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>珠<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>紀<sup>レ</sup>伊<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>弱<sup>レ</sup>浦<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>晴<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を

あまの君

年をへく浪のよほつと玉の珠よめさうとあなをいはしむる

侍従

おほしきまきの浪花をうしかりしつとつとよめさう

大業天皇臨幸六条二月十日

玉の珠よめさうとあなをいはしむる

○此の首のよほつと玉の珠よめさうとあなをいはしむる

よめさうと思ふは地名へ回たまりのあなをいはしむる

たるとたまりのあなをいはしむる

あなをいはしむるの常例なり且考幼年の比古老者

物語と聞い小百首なるうらあなをいはしむる

あなをいはしむるを濁ニコりともびるとなり別玉のあなをいはしむる

あなをいはしむるの近來小及びては土人もたまりのあなをいはしむるモハ

清スレて移の古話のよめさうとあなをいはしむる

玉出あなをいはしむると玉のあなをいはしむる

玉のあなをいはしむるは島とよめさうとあなをいはしむる

あなをいはしむるのよびてたまりのあなをいはしむる

のこあなをいはしむる津文字天津風澳津島等の類

あなをいはしむるのよびて津文字清スレりよびとあなをいはしむる

あなをいはしむるのよびとあなをいはしむる二説一説は皇后の干満二珠の

出づる地今任吉の玉出石島なりといひ又一説小井代の  
湖満瓊湖潤瓊任吉石出嶋より出づること今の二説に  
そつづくは皆<sup>アシキ</sup>瞎瞠の謬傳なりべし又

干珠満珠を弼めし一地誌説の十一説小記物日新  
小御心と按に日新文の始め名系漢志小治世あり此地  
弱浦<sup>ツカ</sup>はほろろちうと海をこえて別玉津島社と當初  
日新文の撰社なりし一六當社の因造又蕙草やう因<sup>ヨシ</sup>  
思ふ彼二珠玉津島の地より出づるをまづて日新文  
物とくはしるなりん又玉津島山明神日新文なりと云  
説も玉津島社日新文の撰社なりし一四章のうへに説あり

物をる由例  
大ま名井と又  
忍穂井と号  
彼水天牟牟雲  
命天上よの身  
半漢の水を汲  
くちめ日向  
小おれ一が其  
の字名屋山と号  
す後い水と号  
圖余謝ま井  
系まろ一孫小  
伊勢外えの傍  
うつさゆに彼  
井のあり西の山を  
号後まも木西の  
名を存て名  
ふと名も今伊  
勢まも井の例

道しこまらふの説小合せき又竊は思ふ玉出嶋明神ハ  
神功皇后を系するなりべし一彼任吉四所名法説に  
第四の社 神功皇后と稱し又の説より第四社玉津島  
と稱す二の説格あなまど今勢ふ思へば二説共<sup>コト</sup>是  
なり小のあはれ 神功皇后ハ弱浦小系家玉出島明神  
玉出嶋明神ハ別 神功皇后の傍よりなりま二の号  
同神なる也なりこまば今の玉津島ハ二珠の出づる地  
なる玉出島と号しこれ別皇后の本縁なりば然  
し玉出島よりこまばの別地名ふよりこ 神功皇后  
玉出島明神と号しなりなるべし今又撰物任吉

の心を返困山と  
ぶく又

大和国十市郡安  
倍村の志に後  
池とてあり彼池  
神代より石凝姥命  
天香山の御を以て  
日後の鏡を藤原  
一とていふこと  
と注し又あつと  
しひは  
深按よけ鏡の池ハ  
おそくハ 葉林  
事の流る神代  
傳り一ハの志鏡  
を藤原のハハ  
其時の新造の神  
鏡を注る回縁  
もや傳らん

四圍城下郡八尾  
村に鏡化社あり  
天藤原命石凝姥  
命の二座を祀れ  
り彼神代の志を  
以て後社社記ナ  
ある池を下市郡不  
正の鏡池にナ  
ぞくて鏡化と  
号せりこれハの  
類考のえびま  
よるあべ

○たが川一ま玉出  
志とてハ名義  
正一とてま玉出  
玉出とてかくと  
注ハ假字ニ稱呼  
不付く後ハおそ  
くはなり只幾

志不玉出志とてあはか一ことと後小姓 皇居をいふ  
きり一より本所龍浦の玉出崎を撰てか一こふあ  
取の志を玉出崎とて名付る後の志を玉出崎に例池所  
とて注しあり

御小甘まぐめハ龍浦本所の号をうつてたが川崎あり  
を後まよ及びこハ出のまづとてとよとてまも又  
目トれバ終よか一こととハたやその志と呼まり一ある  
也一か一こととハ初のまの文字を傳へ玉出志と  
出まれと稱呼ハまどとてたやとてハ本所龍浦とて  
文字稱呼小付く後ト津のまもとて稱呼ハ其ま

たが川志とてを後ハは文字傳くよび一より名義をけ  
たてりいふことあは玉出志とて紀伊國海部郡龍浦小所を  
の玉津崎本所とて今住言あるそのハ後まよとて移  
一とてまも一なるん又玉出崎明神ハおそくハ衣通姫  
とてあべとて果一とて神功皇后なるべ

これハの事跡古来史書かよび神籍考不載取なき也  
今 僕が志考えん人玉浪の言とてハ鏡笑すべく旧説不  
深羽せる志極く信用すべくハ終りといふよりまも  
末を熟思一と疑滞をのろ一とてまも

又按ふ攝州住言四社の中一社神功皇后を祀り奉

八玉出島と云  
卷一

まろの御小住吉の大神ハ表筒男命中筒男命底  
筒男命三神海之<sup>ミハシラノカミノヲシメ</sup>あひしす小皇后<sup>ミナト</sup>在坐<sup>イマ</sup>小住吉地小  
あつせ<sup>ミナト</sup>せ<sup>ミナト</sup>移<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>第四社神功皇后の一座ハ此皇后<sup>ミナト</sup>居<sup>イマ</sup>後  
小あつ<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>そへ<sup>ミナト</sup>な<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>一<sup>ミナト</sup>な<sup>ミナト</sup>れ<sup>ミナト</sup>ば<sup>ミナト</sup>年<sup>ミナト</sup>序<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>經<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>後<sup>ミナト</sup>の<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>なる  
卷一今玉出島小あつ<sup>タニツシメ</sup>り<sup>ミナト</sup>な<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>其<sup>ミナト</sup>年<sup>ミナト</sup>代<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>知<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>は  
ど<sup>ミナト</sup>推<sup>ミナト</sup>く<sup>ミナト</sup>思<sup>ミナト</sup>ふ<sup>ミナト</sup>住<sup>ミナト</sup>吉<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>あ<sup>ミナト</sup>つ<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>な<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>ハ<sup>ミナト</sup>口<sup>ミナト</sup>の<sup>ミナト</sup>あ<sup>ミナト</sup>ん<sup>ミナト</sup>ど<sup>ミナト</sup>を  
按<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>皇<sup>ミナト</sup>后<sup>ミナト</sup>新<sup>ミナト</sup>羅<sup>ミナト</sup>よ<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>ゆ<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>せ<sup>ミナト</sup>め<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>明<sup>ミナト</sup>年<sup>ミナト</sup>系<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>向<sup>ミナト</sup>ひ<sup>ミナト</sup>た<sup>ミナト</sup>す<sup>ミナト</sup>は  
一<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>慈<sup>ミナト</sup>態<sup>ミナト</sup>王<sup>ミナト</sup>紀<sup>ミナト</sup>師<sup>ミナト</sup>其<sup>ミナト</sup>兵<sup>ミナト</sup>位<sup>ミナト</sup>言<sup>ミナト</sup>ふ<sup>ミナト</sup>屯<sup>ミナト</sup>す<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>よ<sup>ミナト</sup>一<sup>ミナト</sup>字<sup>ミナト</sup>え<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>は  
武<sup>ミナト</sup>内<sup>ミナト</sup>布<sup>ミナト</sup>祢<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>命<sup>ミナト</sup>一<sup>ミナト</sup>皇<sup>ミナト</sup>子<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>懐<sup>ミナト</sup>一<sup>ミナト</sup>め<sup>ミナト</sup>く<sup>ミナト</sup>横<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>南<sup>ミナト</sup>海<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>出<sup>ミナト</sup>  
紀<sup>ミナト</sup>伊<sup>ミナト</sup>水<sup>ミナト</sup>門<sup>ミナト</sup>水<sup>ミナト</sup>泊<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>皇<sup>ミナト</sup>后<sup>ミナト</sup>の<sup>ミナト</sup>居<sup>ミナト</sup>船<sup>ミナト</sup>ハ<sup>ミナト</sup>直<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>羅<sup>ミナト</sup>波<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>指<sup>ミナト</sup>す<sup>ミナト</sup>の<sup>ミナト</sup>なり

あひし小馬船海中<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>廻<sup>ミナト</sup>く<sup>ミナト</sup>以<sup>ミナト</sup>て<sup>ミナト</sup>不<sup>ミナト</sup>能<sup>ミナト</sup>進<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>務<sup>ミナト</sup>古<sup>ミナト</sup>水<sup>ミナト</sup>門<sup>ミナト</sup>水  
置<sup>ミナト</sup>く<sup>ミナト</sup>し<sup>ミナト</sup>之<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>に<sup>ミナト</sup>天<sup>ミナト</sup>照<sup>ミナト</sup>太<sup>ミナト</sup>神<sup>ミナト</sup>の<sup>ミナト</sup>海<sup>ミナト</sup>跡<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>荒<sup>ミナト</sup>魂<sup>ミナト</sup>哉  
廣<sup>ミナト</sup>田<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>あ<sup>ミナト</sup>つ<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>な<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>稚<sup>ミナト</sup>日<sup>ミナト</sup>女<sup>ミナト</sup>言<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>活<sup>ミナト</sup>田<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>事<sup>ミナト</sup>代<sup>ミナト</sup>主<sup>ミナト</sup>言<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>長<sup>ミナト</sup>田<sup>ミナト</sup>系  
表<sup>ミナト</sup>筒<sup>ミナト</sup>男<sup>ミナト</sup>中<sup>ミナト</sup>筒<sup>ミナト</sup>男<sup>ミナト</sup>居<sup>ミナト</sup>筒<sup>ミナト</sup>男<sup>ミナト</sup>三<sup>ミナト</sup>神<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>住<sup>ミナト</sup>吉<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>鎮<sup>ミナト</sup>坐<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>  
久<sup>ミナト</sup>平<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>海<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>居<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>得<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>は<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>皇<sup>ミナト</sup>后<sup>ミナト</sup>南<sup>ミナト</sup>紀<sup>ミナト</sup>伊<sup>ミナト</sup>國<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>宿<sup>ミナト</sup>  
り<sup>ミナト</sup>一<sup>ミナト</sup>ち<sup>ミナト</sup>子<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>日<sup>ミナト</sup>言<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>會<sup>ミナト</sup>あ<sup>ミナト</sup>ひ<sup>ミナト</sup>ぬ<sup>ミナト</sup>と<sup>ミナト</sup>こ<sup>ミナト</sup>え<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>  
按<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>津<sup>ミナト</sup>國<sup>ミナト</sup>務<sup>ミナト</sup>古<sup>ミナト</sup>水<sup>ミナト</sup>門<sup>ミナト</sup>より<sup>ミナト</sup>紀<sup>ミナト</sup>伊<sup>ミナト</sup>日<sup>ミナト</sup>言<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>向<sup>ミナト</sup>ひ<sup>ミナト</sup>あ<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>か<sup>ミナト</sup>あ<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>  
醜<sup>ミナト</sup>浦<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>と<sup>ミナト</sup>海<sup>ミナト</sup>跡<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>と<sup>ミナト</sup>あ<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>は<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>其<sup>ミナト</sup>時<sup>ミナト</sup>彼<sup>ミナト</sup>一<sup>ミナト</sup>珠<sup>ミナト</sup>の  
出<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>地<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>れ<sup>ミナト</sup>ば<sup>ミナト</sup>故<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>玉<sup>ミナト</sup>出<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>山<sup>ミナト</sup>の<sup>ミナト</sup>地<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>住<sup>ミナト</sup>吉<sup>ミナト</sup>を<sup>ミナト</sup>よ<sup>ミナト</sup>せ<sup>ミナト</sup>あ<sup>ミナト</sup>ひ<sup>ミナト</sup>  
か<sup>ミナト</sup>ら<sup>ミナト</sup>ん<sup>ミナト</sup>と<sup>ミナト</sup>一<sup>ミナト</sup>あ<sup>ミナト</sup>ら<sup>ミナト</sup>る<sup>ミナト</sup>は<sup>ミナト</sup>り<sup>ミナト</sup>の<sup>ミナト</sup>由<sup>ミナト</sup>縁<sup>ミナト</sup>小<sup>ミナト</sup>より<sup>ミナト</sup>て<sup>ミナト</sup>皇<sup>ミナト</sup>后

崩後小くは初りなりし一ふをや侍し世

又按小玉出意明神の國中小於くもいとやんごとなき

此神なるべし伊右左神乃右神ハ此玉より日本天皇

はたそへ神小玉より此神なり國名を木の玉とよぶ

もい神尚ふは詔をとめさをもへしゆたのり侍る小

正六位を授く也玉出意明神ハ從五位上を授く也

くより按桑畧記小玉出意明神ハ至孝の神

そまうまのりあさうらなり是豈衣通姫なるや

神功皇后そおひまの玉なるべしこれらの美より

ても衣通姫小あさうらなり初めをを

又按小玉出意明神の二神をこして和号せりあ

衣神といひ侍るいりもど本縁をあらす

△袖中抄云私曰放九亮彼中云住吉神主國基云住

吉ハ本三社也亦四社ハ玉出意明神即衣通姫なり後小

はたそ依好和歌詠云

△私曰所昭也之社子相叶日本紀欵又安法天ぐ天てぐる身身詠詠衣通

姫古ハあいりり多くハ妻不分別也

△又契沖河社も云日本紀私記云先師説云稱四座者

神功皇后坐別殿欵是表筒男中省男底省男の二柱也

袖中抄卷十四

あさひと神條曰

拾遺神系

安法法也

天てぐるあさひと

神のあひおむを

思ハく住吉の松

私曰放九亮

彼中云

あさひと神條曰

天てぐるあさひと

あひおむをとおへ

久すまう神

捨遣社未

住吉小寺

安法法師

めあつらあつら

神のあひまひ

思ふ下住吉のま

社三社小寺一今一社を神功皇后をいひまへる

いふなりぬきむむよりたうたうざうけしはち

園基ハ玉は嶋响神をいひやうよりヤうれけと

いり玉は島响神ハ和音をちうせあふりいひふは

ちう成べいひるあうくハ物ふえうりなり

○今按ふこまうの説者ハ神功皇后と稱し玉を玉津

島响神なりといへるあ端を傳へたりと雖も一変せざる

いふうと思へるをうく疑をのこせり

○按ふ住吉四社の内一社を神功皇后おとすは

疑なり又津吉園基ハ当社累代の社勢なりたふ不彼

主の説といども玉は島响神をまへりといひて玉津

島ハ衣通娘なりと思へりこれ古来世間の妄傳不傳て

玉出島响神ハ神功皇后の傳事なりしを解せ

るのこあらぬ知る世俗の浮説を助くまふせり考也

○榮今竊小按ふ玉出島响神ハ龜浦小垂跡ハあるゆゑ

世俗其あなりまると地名をさうて龜浦神と稱しまりし

より後人龜の傳和音の形と同一とこふまうて終り私

歌をちりあふは神とちなりうかへるなり又住吉四

社の中第四の社ハ神功皇后をいふまはりこまうり

と紀伊園龜浦小い皇后垂跡ハあは住吉四社の中

又傳小住吉玉

島二所不放て古

末十三日を社祭

の日と又玉出

島より卯の日城

目い位也ハ卯日

を用い流人ちう

海未するの二

社回社をせり

中ハ住吉玉の形

像なり

第四社一筋の社社をうてかゝこも弱の社社也  
まはるより後住吉玉出島社社二所を合て私奇の社  
社といふやう稱しんをうんことへ南東春日社也  
撰社小記伊の社社といふあり日新五十五種命大倉社  
命抗津姫命をまはるけ四つらの社社本を記伊  
○玉出島社社一また社社を初て弱の社社一こもこの  
社を記伊の社社と稱し此例を弱の社社と稱せ  
をまはる社社小記と皇后の社社を弱の社社と稱せ  
しなうん又撰小記社の名号多し其地名を以て稱し  
まはる住吉とやも撰社地名又郡名をうて弱の社社

固を浦那住吉筑前那珂郡住吉外社也小社社  
社をまはる社社と稱すさも玉出島社社  
すまはる社社と稱し弱の社社と稱しなうん  
こもこの例小思ひ合せて玉出島社社一まはる社社と此  
社社の名偉ある社社の名を以てあがめさる  
神徳の不慈なる社社と稱すさも玉出島社社  
の掲正なる何れ社社をうて弱の社社一まはる社社  
和歌の社社の名号多し其地名を以て稱しなうん  
○玉出島社社一また社社を初て弱の社社一こもこの  
社を記伊の社社と稱し此例を弱の社社と稱せ  
をまはる社社小記と皇后の社社を弱の社社と稱せ  
しなうん又撰小記社の名号多し其地名を以て稱し  
まはる住吉とやも撰社地名又郡名をうて弱の社社



袖師浦

出雲

○袖師浦ハ古来出雲と見えたり彼國人の云々根郡に  
 あり安来と出雲ヤスキ口とのろ湖水の色小あつ浦也これに  
 藤塩系も袖師浦出雲或ハ伊勢と注せり注云同名  
 の地多ク凡バ地名出雲又ハ伊勢も有るやささどと  
 今按小袖師浦ハ統小ありと見えりあり志るふを世  
 貝系等信統前名案を著述せりけ出を伝ふる篤  
 信ハ持覧せ小人あつる且彼白人なり年ありて法歌  
 系及古記の中小於てこれを考索し比年ふりて若  
 那の郷邑を巡るありあちのくトヒ終るて編と成る

よ一其出末ふもこれども此書小と袖師浦由國小  
 ありといふざるハ古来を名久しく埋没しと土人とい  
 ども彼地名を失却せりとのなるべし

○秀栄 サイノゴロ 近曾統前國民部省圖帳を披覧せし小彼國小  
 袖師浦ありこれ小按小續拾遺小載後形於長  
 のふの思くくハいぬの袖師浦をよとあへるなり人  
 續拾遺雜上

題しらすと

後頼朝臣

こむ人乃流と海此浪なりや袖一のうにうぬ目をかき  
 いふ教本系も同く歌志るなりあり二系とも小歌志るなり

載らるるまじりその執意推しおりのこととせしめ業籍に

按小 堀河院嘉保元年六月大納言経信の宰案推

帥小遷小これと筑紫小下向ありそと及後頼朝長父の卿に

具して目下くつり孫ひしが承德元年正月経信卿を

宰府にて薨しぬりしが六後頼朝に於てふありて且

さのふちをいしとをそとく後帰洛あり其程彼地よそり

御方より取系の道すう船中乃和ふすまぐ五十後

首教本集弟七六悲歌ヲシハカ此歌ふとえり今の歌を強て推し

るに一定け時の歌なるべし神海邊かこの名所なまじり

當時の悲涙をうふよせと見えぬふらんはくは此

歌も同じく悲歌の歌ふ載るるまじりあるべきを教本

集今世間流布の本精字のあやまりすまじりなまじり

錯乱の取極とありとまじりなまじり歌もまじり彼例とあや

まりとまじり小雑の部よ入る歌まじりすとあまじり又

夫木集小載る

高遠卿歌

沖つ風身まじりまじりんやう衣袖のうらふまじりなまじり

按小 小言遠の右宰大就と彼国小りまじり人へ此まじり

此の在國のる彼地の名所をよまじりなまじりなまじり

二首の歌を按小 小師潘へかみまじり筑紫よある所の

名所をよまじりなまじりとおまじり

大日本國西海濱道筑前國民部省圖帳

志摩郡

袖師浦 出鮮魚充内膳司乾魚

とこえうねと宗民於省圖帳を多く並びて跡簡世  
上よ流布すこの稀なれば袖師浦も此と共よ其  
名かたきとて宗小園えざるあべーとてびひとふ出せと  
のこまきあつて筑前にあるへ埋木の人名をぬ所とあら  
るるやあつん

追考

袖師浦伊勢よあつといふと

△宗祇名所方角抄伊勢園の目

△伊勢崎下流河原とよ縁浦を出して曰

おれ交る柳櫻もなるとる宗よとてのうとて其の明目

後拾遺巻一

藤原國房

布衣袖一のうとて川せ貝むなとて其よ手もへあつん  
○や新後拾遺は伊勢とすべとてや能きども此  
説もいとよれとて又よ小流とてひとて縁浦伊勢  
うとあつて旧く志摩とて今ハ紀伊小属せりといふ  
は思ふも只その名を奉るるむらりてを地ハハ明あつ  
ざるその明り

又按小波河も同名あり

△ 釈 堯好居士紀行は清見寺の次小云

袖師浦へ出雲國とこそ安住し小波浦も同名たり

雲ふくお月神の浦今いつ小布とてめうり

○ 按小波浦は系隆房の院小波士の烟を我思ひ

よりしつとれどろと清見の島をえし袖しは浦

よりまよらうとそはちけりとかきしこれなり

堯好も覚悟なうりしや又

△ 李花系よかこを扱ふく出住りしお月神の雲

暁くふなりぬるふまゆふ見えたるも月神の雲

系と園乃小志なりしとてすし侍りし袖のうら風

秋の夕より身小しむちちせし

何のやら乃末までゆいぬいやはさの清見も秋のそふ

○ 按小波浦の浦もおきし袖師浦なるべしやもし

去文字なるを

又連歌附合とせし物よ云

そあし袖の浦は朝月もあふる乃なれなるん

袖師浦は丹後天、持立なりしはの海小波也と云

小波は同名多かるべしを前によりしし

海はしものなり

泪河

新後拾遺意考

歌しうさ

相換

重々来

何ぞか

とぞ有也

かみみふり

とぞいひり

とぞも神の渡り

たぬもゆふり

みちのくは神乃とらうのをさる河をのうらふあうてそすむ

○此の類字小社の渡ふ出しうれど伊勢の外別に陸

奥よ流河を出していふを再出すべし

長等山尾上

新後古今秋意

新玉津島社二十そまよ 祝新成光

あまうけさかそことふすこのなる神代をのうらふ山のみ月

○此歌類字に撮は名柄近の長等ととよ不載漏る

事考小新玉津島社二十そまよと見えんれど他考祝新

成光の日吉の祢宜をればはるがうの山の世うくは彼社際ふ

ちうさの長等山をよめるなるべし又

新後撰神祇の

題しうさ

新大納言為氏

はなみや神代のまされそのまにむうなるうは浦風そま

類字よ長等山のこ有く長等浦なりし歌漏る長等

浦を出していふを載るし

清溪

金葉集雑歌

巻しし守

中納言雅定

あつひのつとなきはの溪ふもる見れらるかふねのこそ鳴

玉葉集雑歌

なくありぬんちちく  
なうこよこけりりる

藤原門院少将

あつひも今のそはの溪ちとらぬその名れ詠やのこそえ

同集

致くみけりるは人のたつは  
菱系孝標朝臣女

なくさひのつとなきはの溪ふもる見れらるかふねのこそ鳴

○類字小法溪なりしよりく此こそ歌漏るう按ふ名系溪

八紀伊國名系那名州山の麓小あり上人あつらる布引溪

と稱す又土俗名茶那をなごこの歌といひ名系山をを

あごこ山と常ふりり花もばい法溪も其くくハ別名

州溪なるべー彼香山をかご山足柄をわーがろ小縁法を

こよろご香推をかすひなごりる類なるべーこれら皆通

考通語なる色ハ彫り名系と法と又通考なりこ色ハ小

法の溪を出して此二首の音を載其由を注すべし也

鳴瀧

紀伊 牟婁郡  
山城有同名

新古今集神祇

思ふり多にわさるまてなる瀧の志くよと心を何恨むらん

此歌身のきつめを致さく東の方へかへんと思ふ  
人の熊野乃れまへに通夜しく侍りて爰小見えりとも

○今按ル小鳴流ハ牟婁郡小あづみ古園名系郡園部村の妻  
逐小ありの深蛇流王二上檜現の小初あり役小角ハ丹基ハ  
葛城修孫の一場まで尤古変也往昔修孫道繁冒せし  
比ハ其名上小ありのひく知る所なれば爰想ふも此流の名を  
とて昔をせめたるなりハ中世に牟婁郡修孫處類せしより  
まゝ彼古流の隠没せるものと小あづみを名をてよ世不知  
人希ふなりハさきバ熊野の流まへそのまゝあるれば流  
熊野ハ有べしと種をりて牟婁郡とハ注せたるなり

但今熊野本文の色小鳴流と稱する流ありこれハ又比れ  
ふよりて強てい色にあり流を名付し後人の所為なり  
名系郡にあるところの鳴流ハ由來いれあること古蹟也

### 七瀬淀

○名所小あづむりハ吐懐編よことハあり

今按ル小七瀬と云ふハ八瀬といひ五十瀬イセといひ八十瀬と云  
只瀬の多きをさきよめて云ふなりハ今俗  
まゝく河瀬の多きハ四十八瀬河と稱す

